

マッチ

森本眞智子

仏壇の前でローソクに灯をつけようとして マッチの小箱を取り上げる
人生はマッチの小箱に似ているといったのは 芥川龍之介 だったか
重大に扱うのはバカバカしいが 重大に扱わなければ危険だと

マッチを小箱の横で擦って火をつける

そのとたん マッチが半分に折れた

火がついたまま 畳の上で燃えているマッチ

燃えているマッチを指でつまむことなど できはしない

悲鳴に似た声をあげながらあたりを見回しても からんとした仏間には 何もない

畳が 焦げはじめ

ワアツと言いながら 廊下へ飛び出す

履いてきたスリッパで まだ燃えているマッチと畳を叩く

畳はすでに 少し黒く焦げていた

ひと昔前までは この一本のマッチがどれほど大きな役割を果たしたことだろう

暗闇で 探し物をしたものがいただろう

寒さでかじかむ手を 温めたものがいたかもしれない

ご飯を炊くのも お風呂をたくにも 囲炉裏に火を燃やすのも

この一本のマッチから始まったことだろう

すぐに停電する戦中戦後にも ローソクと共に貴重な生活用品だったにちがいない

わたしの一生は 今現代のマッチのようなものかもしれない

あっても さして 邪魔にはならないが なくても誰も困りはしない

有意義に燃やせた日が どれだけあったか

そろそろ わたしのマッチ箱の 底が見えてきた

わたしは あと 何をすればいいだろう 大きなことは考えない

何もしなくても 良い一日だったと たいてい心は満ち足りている

ひとを喜ばせるのは難しいことかもしれないが せめて 人を思いやり

人が嫌がることはしないように 言わないように

誰にでも 覆いかぶさってくる老いを避けることは出来ないが

それでも まだ あらたな出会いも挑戦も受け入れて

さわやかに 生きてゆけたらいい ね